# 大学初年次を対象とした情報倫理としての引用を学ぶ教材について

# A Material to Learn Citation Rules as Information Ethics Education for First-Year Experience

久保田 真一郎, 杉谷賢一, 中野裕司, 武藏泰雄, 戸田真志, 右田雅裕, 喜多敏博, 北村士郎, 松葉龍一, 岡智典
Shin–Ichiro Kubota, Kenichi Sugitani, Hiroshi Nakano, Yasuo Musashi, Masashi Toda, Masahiro Migita, Toshihiro Kita, Shiro Kitamura, Ryuichi Matsuba, Tomonori Oka
熊本大学
Kumamoto University
email: kubota@cc.kumamoto-u.ac.jp

大学入学時の情報倫理習得状況に格差があり，先行研究で行われた調査では，著作権の内容の中でも「引用」の理解が進んでいないとの結果が報告されている．著者と共著者の間で検討を行い,「引用」の理解が進まない理由は，高校あるいは大学初年次に「引用」を必要とするような主張のあるレポートの作成を行わないため,「引用」を現実に起こりそうなこととして捉えていないのが原因ではないかと考えた．そこで，これまで著作権の一部として「引用」を学んだ後に，レポートを作成するという演習としていたものを，授業内で「引用」を学ばずにレポートの作成に取り組み，トゥールミンの方法による主張の組み立て，そして主張に必要なデータとして他人の著作物を引用するという順番で構成した．この順番は，メリルの第一原理を参考に配置したもので，本報告では今回の取り組みの設計とその効果について報告する．

キーワード：初年次教育, 情報倫理, 引用

## 1. 背景および問題点

本研究では，高等教育初年次を対象とした著作物の「引用」に関する授業実践について報告する．河村ら[1]は，一般情報教育の枠組みについて述べ，3 項目の 1 つとして情報倫理をあげている．また，ICT の高度化によりその社会活動も大きく変化するため高等教育においても継続した情報倫理に関する教育が必要としている．阿濱[2]は，大学初年時を対象に 3 年続けて知的財産教育に関する調査を行い，回答者の半数が入学前に著作権に関する学習経験があるという結果を報告し，初等中等では情報モラルとして展開されているとしている．このように大学入学前に，著作権への理解や引用技能を習得する一方で，布施ら[3]は，調査で著作権の内容の中でも「引用」の理解が進んでいないとの結果から著作権教育方法について報告している．著者らも高等教育初年次を対象とした一般情報教育に長年取り組む中で,「引用」に関する学習について，その難しさについて議論を重ねてきた．そこで，われわれは，メリルの「ID の第一原理」をもとに，現行の授業の問題点を確認する作業を行い，授業改善に取り組んだ．

## 2. 現行授業の問題点の洗い出し

本学入学者約 1800 人を対象に，1 年生の前期と後期を通して，一般情報教育を行っており，すべての学部の学生が同一のオンライン教材を使い，パソコン演習室で学ぶ.「引用」については前期の第 5 週目と第 6 週目で扱っており，総括的評価に用いるための課題においても，課題条件として扱うような構成になっている．第 5 週目と第 6 週目のオンライン教材のうち「引用」に関する内容は次の項目である．

| 第 5 週目 |
|---|
| ...<br>3. ネットワーク社会における法的責任 –「著作権」–<br>4. 他人の著作物の引用<br>4.1. 「引用」例の正解と解説<br>...<br>11. 今週の注意<br>12. 課題–引用と著作権侵害に関する事項について–<br>... |
| 第 6 週目 |
| ...<br>2. レポートの書き方<br>3. 総合演習（演習 1 ）<br>4. 引用が適切であるか判断できるようになる（演習 2）<br>... |

鈴木らの解説論文[4]に，メリルが提唱する「ID の第一原理」[5]について解説があり,「ID の第一原理」5 項目について解説がある．現行の授業に対して上記 5 項目に沿ってできていることできていないことについて整理した．紙面の関係上「現実に起こりそうな問題に挑戦する (Problem)」のみ記載する．

「レポート作成」という状況を 1 つの現実的な問題として設定している点は良いと思われるが，学生がやりたくなるような現実問題とするには，レポートを作成してみたがうまくできていないことをフィードバックする必要がある．そのためには，(1) レポート作成とその問題点を考えることから出発して，自分のレポートの問題点を 1 つ 1 つ見つけては修正するという工程とする．現行の授業では，説明したのちに複合的な問題に挑戦する順番であって，学生の経験を使ってレポートを作成するような設計ではなかった．そこで，(2) レポートの作成は過去の経験から作成させて失敗させる．(3) 引用技能を使用する事例は，これまでの事例紹介

やその学習活動で効果がある．これまで第６週「3. 総合演習（演習１）」として応用の機会を設定していたが，複合的な応用とせず，レポート作成という応用と引用技能という応用に分けて構成する．

| 現実に起こりそうな問題に挑戦する (Problem) |
|---|
| (YES)<br>第６週では，実際のレポート作成という課題に取り組むときに，他人の著作物を扱うケースになれば，現実に起こりそうな問題として学ぶことになる<br>(NO)<br>引用技能の基本となる「主張の書き方」「他人の著作物の使用」といった基本的な内容と関係付けて現実に起こりそうな問題として提示できていない． |

## 3.　学習項目「引用」に関する階層分析

前節の「ID の第一原理」をもとに考察した結果 (1)–(4) を念頭に，学習項目「引用」に関する階層分析を行った．その結果を図１に示す．前節 (1)(2) から初めにレポート作成に取り組む階層構造になっている．そして，レポートに必要な主張の文章を構成できているか確認し，参考にした情報の出所の記載，そして，他人の著作物の扱いと引用という階層になっている．

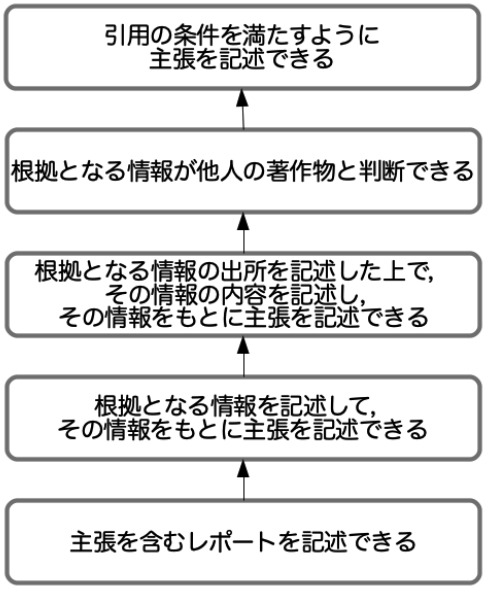


図１　学習項目「引用」に関する階層分析

## 4.　授業改善後の構成

下記に授業改善後の構成を学習項目「引用」についてのみ記す．

## 5.　実施とアンケート

前節の構成にして実施した効果を測るために，授業実践後に，アンケートを行った．アンケートは任意で，1782 名を対象にアナウンスし，267 件の回答が得られた．質問項目は属性情報から始まり，第５週の宿題に関する問いと第６週授業への取り組み具合および満足度について調査した．回答者のうち約 54 %の学生が完全に第６週の演習を完了したと回答しており，約 61 %の学生が第６週の内容に肯定的な回答であった．

## 6.　まとめ

今回，本学初年次を対象として実践される一般情報教育を扱う科目において，学習項目「引用」に着目し，レポート作成経験の少ない初年次学生にも現実の問題として捉えることができるように教材を構成した．その構成は，宿題としてレポート課題を課し，授業では作成してきたレポートの問題点を下位層から順番に指摘する教材とした．これによりレポート課題を現実の問題と捉え，新たな知識の必要性を感じて学ぶ構成とすることができた．我々の分析では，未だ改善の余地があると考えており，引き続き改善に取り組み，初年次を対象とした引用技能教育を効率的に効果的に構成するデザインについて今後議論したいと考えている．

| 第５週目 |
|---|
| ...<br>11. レポートの書き方<br>12. 総合演習課題のための宿題<br>... |
| 第６週目 |
| ...<br>2. 総合演習課題<br>3. 参考文献の明示（参照した情報を明示する）<br>4. ネットワーク社会における法的責任 – 「著作権」 –<br>5. 他人の著作物の引用<br>　5.1. 「引用」例の正解と解説<br>6. 引用が適切であるか判断できるようになる (引用チェックリスト)<br>... |

## 参考文献

(1) 河村一樹他:“これからの大学の情報教育”, 日経 BP マーケティング (2016).

(2) 阿濱 志保里:“大規模調査に基づく知的財産教育の現状：3 年間の大学初年次教育における調査に基づいて ”, 日本知財学会誌, 13(3), 56–64 (2017).

(3) 布施泉, 岡部成玄: “高等教育における著作権学習–学習による意識への萎縮効果をふまえた学習構成”, 教育システム情報学会誌, 26(1), 42–51 (2009).

(4) 鈴木 克明, 根本 淳子: “教育設計についての三つの第一原理の誕生をめぐって”, 教育システム情報学会誌, 28(2), 168–176 (2011).

(5) Merrill, M. D.: “First principles of instructions, Educational Technology Research and Development”, 50(3),43–59(2002).